

令和6年4月12日 市長定例記者会見 会見録

◆司会

それでは、ただいまから、市長定例記者会見を始めさせていただきます。
市長、よろしくお願いいたします。

◆市長

はい。よろしくお願いいたします。今日は一件ですね、リニア中央新幹線環境影響評価生態系への影響についての基本認識、現状認識と今後の検討の進め方になります。

今日、なぜこの発表かということですが、4月9日に静岡市中央新幹線建設事業の評価委員会、協議会ですね、影響評価協議会を開催しました。市協議会と呼んでますが、ここで、リニア事業の環境影響評価についての検討をいたしました。この市協議会と静岡市そしてJR東海の間で意見交換が行われて、今後の検討の進め方について意見が一致しましたので、今日は改めてその内容について、ご説明するというものです。

お手元に資料ですね、A4の縦のものが4枚と、それから参考資料というのがついておりますけれども、最初に概要についてざっと説明をいたしまして、その後パワーポイントの資料で少し追加説明をいたします。

まず、概要のところですが、検討の進め方の一致がということかということです。まずシミュレーションの結果には不確実性があると。また、流入の現状のような水分量の変化は局所的な地形の影響等によって予期せぬ場所と形で発生する可能性があります。よって、あまりに精緻な予測を求めても、不確実性は必ず残ります。予測結果に不確実性があることを前提に、適切な順応的管理の方法を考えるべきです。順応的管理の方法というのは後ほどご説明いたします。

そして、この影響の回避・低減努力を行っても、何らかの影響は発生すると。それが確実であることを前提として保全措置を考えることが重要です。発生する影響については、これは不確実性がありますので、その最大量を想定するという事です。そして順応的管理で不確実性に対処するのですが、この順応的管理は後ほど説明します。

その上で、植生への影響の具体的な順応的管理方法と代償措置を決定する、水生生物への影響の具体的な順応的管理方法と代償措置を決定すると。そのようなことをやるためには事前の観測が大事ですので、その観測内容を決定するというものです。

その一方で、市の協議会とは別に、南アルプスのユネスコエコパーク登録10周年になります。この10周年を新たな契機として、静岡市は南アルプスの「環境保全と持続可能な利活用の調和」に向けて、これまで以上に積極的に取り組んでいきます。この取り組みをいっそう広げるために、静岡市だけで何かやるとか、ボランティアだけをお願いするということではなくて、社会の大きな力と世界の大きな知恵が集まって繋がるのが大事です。このため、南アルプス環境保全と持続可能な利活用調和のための

具体的行動の必要性に共感をいただいた方々と静岡市が「連携・協働・共創」を促進していくために、パートナーシップ宣言の締結を行います。このパートナーシップ宣言については3月末に一度ご説明をいたしました。改めてここでご紹介をいたします。そして、このJR東海による適切な環境保全措置と、社会全体の力による南アルプスの植生の回復を含める環境保全と持続可能な利活用の調和ですね、これをしっかり進めていくと。この二つを進めていきたいと思っています。それによって南アルプスの環境保全は促進されると考えております。

それでは、パワーポイントの資料でご説明をさせていただきます。まず適切な環境影響評価が必要なのですけれども、その考え方はどういうことかということです。この環境予測をできるだけ精度高く行うというのは重要です。しかし、この精度の高さを追求し続けても限界があります。トンネルは、山の中を深く掘っていくわけですから、全体の状況、その地形地質の状況を知ることはできません。したがって、影響予測には不確実性があるということ認識します。その上で、環境の保全措置計画だとかモニタリング計画を定めます。これをやろうと思うと、この適切な回避・低減・代償措置が行えるよう、影響を一定の精度で予測する必要がありますが、国の有識者会議で、この影響の予測についてはかなりの精度で予測されていますので、それはそれで使っていくということ。その上で、もう一度この保全措置計画、モニタリング計画を定めてですね、そして、影響の回避・低減措置を施工前・施工後にできる限り行い続けると。それをやると、工事を進めていくと影響が出るかもしれませんので、おそらく何らかの影響は生じます。それで観測結果を見て、影響の代償措置を行う。この観測評価の結果ですね、あるいは想定外の影響、思わぬ影響が出れば、もう1回計画を見直すということになります。これが順応的管理ということになります。

もう一つ、シカの食害等によって南アルプスの高山帯の植生は、もう既に大きな損失を得ています。したがって、これの回復が必要なわけ。こちらの回復とこちらのJR東海の順応的管理、二つをあわせてですね、みんなの力で南アルプスの希少な生物の生息域を回復していくというのが基本的考え方になります。次、お願いします。

シミュレーション結果、影響が出るということの予測の精度ですけども、これは国の有識者会議で認めたといいますか、そういうシミュレーション予測モデルを作って、ここで湧水期にどのくらい沢の流量が予測されるか、どのくらい流量が減少するかを予測しています。トンネル掘削前とトンネル掘削後ですが、薬液注入というトンネルの中の湧水を防ぐ措置をしない場合ですが、このように蛇抜沢というところですね、こちらが蛇抜沢というのがあって、ここが西俣川というところに落ちていくわけですけど、この辺り上流の部分で、トンネルの掘削前は水があるわけですけども、トンネル掘削後はこの辺りの水がないというのが明らかになっていると思います。したがって、この辺りの植生には明らかに影響が出る、こういうことがおきているということは、この辺り全体の湧水量ですね、沢としてザーザー流れるようなものではなくて、例えば、

地表を少し湧水が出てくるような状態もあると思いますけども、そういうところで植生は、生物は育ちやすいわけですけども、そういうところの水分量も減ってくる可能性がありますので、この蛇抜沢のこの辺りというのではなくて、この辺り一帯の生態系に影響が出ると考えられます。

ただ、このシミュレーションをこれ以上精緻にやっても、どのくらいその精度が上がるかという、それほど精度は上がりません。したがって、おそらくこの程度だということ的前提に、これだけじゃなくてもっと大きな範囲で影響が出る可能性があるということ想定して、これから対応していけばいいのではないかということです。次お願いします。

これが順応的管理ということですけども、不確実性、よくわからないことがあるので、走りながら考えていこうというものです。工事の実施前にしっかりとした影響の予測・分析評価をして、そして施工の計画と影響の予測評価を行うということになります。そして、影響の回避低減のためにしっかりとした保全措置の実施計画を作る。これは工事の開始前ですね。そして、モニタリング、どこをどういうふうに調査するかというモニタリング実施計画もしっかり定めます。そして、ここにこれまでの影響想定といいますか、どのくらい影響が出そうか、先ほどシミュレーションでこの辺り、このくらい影響が出そうだという想定がありましたが、その予測の影響予測想定もしっかりしておくということになります。

それで、その後、工事をやるわけですけども、そうすると、観測結果が出てきます。ここに施工開始後のモニタリングというのがありますが、この施工開始後にモニタリングをすると、この施工開始前と後でどう変わったか、そして、その変わりようがこの予測とどう変わったかということですね。ちょっと前のページ戻っていただいて、例えば、工事の開始前ですね、この蛇抜沢のところには、このような植生があったんだけども、工事を開始して、ごめんなさい。この沢にはですね、このくらいの流量が観測されていたんだけども、工事を実施したら実際に流量がこのくらい減ったと。その減った量がですね、この予測通りに減ったのか、それとも予測よりも小さかったのか大きかったのか、そういうあたりを評価するのが大事になります。次のページをお願いします。

順応的管理のこれですね、この今の工事実施前のモニタリング計画と実施後のモニタリング調査結果と、それから先ほどの影響予測の想定を比較評価して、あんまり違っていなかったら、あるいはちょっとの違いだったら保全措置の微修正をするということですね。そして、保存・回避・低減措置だとか代償措置をやって、また工事を進めていくことになります。もし大きな影響が出てくると、こちらに大きなPDCAの繰り返しになっていきますけども、想定より大きな影響が出たので、もう1回影響の分析評価をする。シミュレーション結果と違う結果が出てくるので、シミュレーションのパラメータというか、例えば透水係数をちょっと変えてみるとか、そういうことで影響

の予測をもう1回しなおす。そして、場合によっては施工計画自身も変える。そして、この結果影響予測が出ますから、またここで影響予測想定をしておいてですね、そして保全措置をし、工事を実施してまた観測をすると。この大きなPDCAと言っていますけども、計画をして実施してチェックしてまた行動を直していくと。こういうPDCAですね、プラン・ドゥー・チェック・アクション、このサイクルを繰り返していくということになります。これが適切な環境影響評価、ごめんなさい、順応的管理ですね、環境影響評価における順応的管理になります。

これは静岡市の順応的管理の考え方となっていますが、国がこれのもととなる図を作ってくれていますけども、より正確な形でこういうふうに作り変えております。9日の市の協議会の中で、これとはちょっと違う図を出してしまっていて、そのときに委員の先生方から御指摘をいただきましたので、それを踏まえて、このように最新のものに変えております。次お願いします。

植生に対する代償措置の基本的考え方を決めると言っていましたけど、それはどういうことかということですけども、影響はですね、非常に確度の高い影響、ここは必ず影響が出るだろうというのと、それよりも発生確率が低いだけでも影響が出る可能性がありますねと。さらに発生確率は低いので想定外と思われるけど影響が出る可能性があるというのがあります。そのときに、これに不確実性にどう対処するかということが課題ですから、どう対処するかというとA案とB案があります。A案というのは予測の確度を上げるということですね。こういうような状態じゃなくて、もっともっと詰めていって、どのくらいの影響が出るかというのをはっきりさせましょうという考え方です。でも、これは先ほど申しましたように、これ以上影響の予想の確度を上げることは非常に難度が高いわけです。実際に上がる可能性というのはあまり大きくありません。したがって、ここの努力をあまり大きくしていくよりも、こちらの案ですね、もう影響予測の確度を一定程度まで上がってきたので、それにはもう限界があるとして、このモニタリングをしながらですね、大きめな代償措置で対処しましょうと。このような大きな影響が生じたとしても、何とか代償措置ができるようにあらかじめしておきましょうという考え方です。こちらですね、あまりここを詰めることはしないで、大きな代償措置をするんですけども、先ほど言いました沢が枯れていますので、その沢ではもう代償措置はできませんので、別の場所で代償措置をするということになります。この考え方と、それから南アルプス全体の植生の回復の仕方が次の図になります。非常に細かい図ですけど、こちらはですね、リニア事業による環境影響想定です。これで想定される環境影響というのは、このくらいの損失量だとします。これに対して代償措置をするんですけども、移植はそこに生えているものを向こうに持って行って移植、播種というのは種をまくようなことですね。でも、これは選択しないとしていますけども、機能しない可能性が非常に高いです。元々そこに生えていないものを移植しても、大体はそれ以上生育しないというのが普通だと思います。したがって、

これはもうやらないということになります。何をやるかというところですね、別の場所で代償措置をやるということになります。この量と同じ量をリニア事業による影響の最大量の回復量としてJR東海が実施するということになります。

ただ、この分だけやるのではなくてですね、もっと違う考え方が必要だと思っています。先ほど申しましたように、南アルプスはシカの食害でお花畑が相当量損失をしています。それも、これまでに被害の拡大の防止努力をしてきました。防鹿柵を作ったりしてですね、被害の拡大防止の努力をしてきました。もし何もしなければ、これぐらい大きな影響が出ていた可能性があります。ボランティア含めみんなで一生懸命努力をして、今このくらいが損失をされているとします。これを全部回復するというのはなかなか困難ですけども、少しでも回復するというので、このみんなの力、後ほど出しますが、南アルプスパートナーシップで、みんなの力で回復していきましょと。社会全体の大きな力で回復していきましょとということ。それにJR東海ものっかってもらってですね、リニア事業による影響の最大の回復量はJR東海も参加をし、ただ他のところは関係ないよというのではなくて、この全体の回復についてもですね、JR東海も協力をしていただくと。とにかくみんなの力で回復していくとすれば、ここで想定される影響を上回る植生の回復ができますので、南アルプスの環境保全は進むという形になります。これが植生に関してです。

希少な水生生物についてはそうはいきません。食害、鹿の食害でやられたわけではなくてですね、例えば特定の種はこの種の交雑ですね。特殊な魚がいるとしてですね、その魚とよく似た魚が交雑してですね、そのDNAが混ざってしまうということが今起きていますので、そういったこととか、あるいは生息環境が悪化をして、純粋種の生息量が減っているような状態があります。これについてはこれまでの保全措置はほとんど行われていません。これは植生と違うところ。やはり、これも、いよいよ本格的に取り組んでいかないといけないということで、これは静岡市とJR東海、社会の大きな力の協働で、やはり回復を図っていきます。このときに、水生生物への影響というのは、リニア事業による影響がありますから、それはしっかりと回復をします。こちらで失われる分を回復するんですけども、それ以上の回復措置をみんなの力でやっしていこうと。それに対してJR東海が協力するということになります。

そうすると、南アルプスでこれまで失われた生態系の改善に、社会全体の大きな力と協働で本格的に取り組むことになって環境保全がより進んでいくことになります。JR東海さんに、やれやれというのではなくて、みんなで行っていきましょという考え方です。もちろんJR東海にはその活動に積極的に協力いただきます。次お願いします。

今の社会の大きな力の協働ということですけども、静岡市とですね、この多様な主体の南アルプスパートナーシップ宣言というのを今進めようとしています。これはエコパークの登録10周年を新たな契機としてですね、みんなの力でやっしていこうという

ことで、これは大事ですよと。南アルプスの環境保全と持続可能な利活用の調和は大事ですよという、それについて行動が必要ですよという共感をした方々と、静岡市が連携・協働・協創をします。そのためのパートナーシップ宣言というのを行います。これは物を提供していただいた人だったり、お金だったり、学術的な知見だったりそういうことがあります。

今のいろんなところにお声をかけていて、良い反応をいただいていますので、このパートナーシップ宣言の公表をどこかでしたいと思っています。このような形で、リニアの事業と、それからリニアの事業による影響の回避・低減・代償措置とですね、南アルプス全体の環境改善の両面を取り組んでいきたいと考えております。これについては、JR東海さんもですね、考え方、資料の中に少し書いていますけども、JR東海としても積極的に尽力をしていくとおっしゃってくださっていますので、この考え方で進んでいくということについては、JR東海と静岡市の間で合意ができていると思っております。以上が発表になります。ありがとうございました。

◆司会

それでは、ただいまの発表につきまして、まずは皆様からのご質問をお受けしたいと思えます。はい、日経新聞さん、お願いいたします。

◆日経新聞

日経新聞です。この南アルプスパートナーシップ宣言でもお話されていましたが、今の話だとJR東海は、もう参加するという合意ができているということですか。

◆市長

お声をかけていますので、今、検討をいただいている状況です。

◆日経新聞

代償行為、いわゆるリニアの工事における代償行為を、また別の場所の環境、生態系とかを回復することで代償するという話でしたが、具体例として出てきているのが日本シカの食害のみだと思われるのですが、その他のいわゆるその失われたと言われる環境の回復というのは現時点ではあるのでしょうか。

◆市長

影響が出るのは植生と水生生物ですので、植生についてはシカの食害で大きくやられていますから、それを回復することによって、代償措置を上回るような回復ができますので、非常に効果的じゃないかなと思います。それ以外にも、希少種について局所的にやるということも大事で、例えば防鹿柵だけじゃなくて、荒地地のところにマットを

敷いてそこに種をまくとか、移植をして種をまくのが多いですけど、その中で育っていく。新しい植生ができていくというのをやっていますので、ちょっと今日は写真を置いてませんが、そういうこともあります。

防鹿柵だけじゃなくて、尾根部分での植生回復とかですね、そういったことが大事になってくると思います。例えばですけど、高校生がその種を持ち帰って、今、育てているということをやられていますから、その高校生が育てた苗をですね、移植するっていうのはあります。元々生えていたところに移植するのですから、生えていないところへの移植、生えていたところに移植するので、その移植というのは、機能すると思っています。

◆日経新聞

あと、すいません、あと1問。南アルプスパートナーシップ宣言で、いわゆる一般の方であったりっていうのも、これに参加できるというふうに理解しているのですが、そうになると、リニア工事によって行われるべき代償行為を、市民であったり県民の人々の費用であったり、人的負担を強いて行うということになってしまおうとは思いますが、それについての考え方を改めてお伺いできればと思います。

◆市長

ちょっとこれ前のページに戻していただいて。これですね。ここの部分ですね。リニア事業による最大量の回復量は、JR東海が責任を持ってちゃんとやっていただくわけですね。それを上回る部分ですね、その植生の回復のところは社会全体の力でやると。これがですね、例えば元々花畑があったところで、このエリアはJR東海がやりますよと。このエリアは社会の力でやりますよといったら無駄なわけですよ。例えば、これで1千平方メートルの損失があったとすればですね、こちらで1万平方メートル回復しましょうという努力をするということですね。そうすると1万平方メートルの中に1千平方メートルが入っているの、一緒にやったらいいじゃないですかということですね。はい。

◆日経新聞

はい、ありがとうございます。

◆司会

はい、中日新聞さん、お願いいたします。

◆中日新聞

中日新聞です。ちょっと純粋な疑問なのですが、増えすぎた鹿をですね、狩ると

いう選択肢はあるのでしょうか。

◆市長

はい、もちろんあります。努力もいろいろやってですね、効果が出ていますけれども、なかなかですね、今、例えば、猟師さんの数も減ってきていますので、なかなかその防止措置が効いていないということがあります。伊豆半島ではですね、静岡県が積極的に取り組んで、個体量の管理というのを進めていてですね、ある程度効果が出ていると聞いています。

ですけども、ちょっと南アルプスはなかなかまだ手が十分入っていないので、これから猟師さんの力を借りるとかですね、そういった取り組みを、同時になると思います。防鹿柵だけじゃなくて鹿自身の個体管理をすると。それをジビエといいますかね、食として提供するということもあり得ますので、そんな取り組みも必要かなと思っています。

◆中日新聞

今のジビエは以前、予算のときにミュージアム、南アルプスのミュージアムでジビエを提供するという話もありましたけど、そういうケースもあり得るとのこと。

◆市長

そうですね。そういうこともあり得ます。

◆司会

はい。その他いかがでしょうか。発表案件につきましては、以上ということよろしいでしょうか。

◆司会

はい。それでは幹事社質問に移りたいと思います。
産経新聞さん、よろしくお願いいたします。

◆産経新聞

はい。今月から幹事は産経・毎日・SBSということで、今日は代表で産経が質問させていただきます。今週、川勝知事が辞職願を提出されました。この件についての談話等は、既に市長は発表されてらっしゃいますけども、今後リニア問題とかですね、それ以外のものもあるのかもしれませんが、こういったところへの影響というのが出る可能性もあるのかないのか。あるいは出たとすればどんなとこなのかということですね。今後、知事選が始まるわけでありまして、今後、知事選に当選して知事になるであろう人に何を期待するか。期待する後任の知事像、この辺をお伺いできればと思って

おります。

◆市長

はい。まず、リニア問題の影響ですけども、どのような方が選ばれるのかわかりませんので、どういう影響が出るかというのはわかりませんが、今日は基本的考え方をお示しをしてですね、これは県にもご説明をしたいと思っています。あるいは国のモニタリング会議にもご説明をして、こういう方向でいいのではないかという話に進んでいけたらなと思っていますが、そうであればですね、変なことを申し上げているわけではないので、後任の知事も、この考え方に沿ってやってくださるのではないかなと期待しています。したがって、リニアについては、問題解決の方向で進んでいければいいかなと思っています。

もう一つ期待する後任像のようなことですけども、今、静岡市は非常に人口減少厳しいわけですけども、これは静岡県全体でも同じで、静岡市よりも少しいい程度で、人口減少が厳しい状況にあることは同じです。そのときにですね、市も県も一緒になって、これまでの延長上にはないやり方をしていけないと思っています。そのときにどういうやり方をするかということですけども、今日もリニアでの、ごめんなさい、南アルプスの環境保全について社会の大きな力による共創、ともに創っていくというお話をしましたが、これは社会の大きな力の共創とともにですね、やはり行政機関同士ですね、それで共に新しい価値を創っていくっていうことが必要だと思っています。やはり県と市町、市町が連携をして、一緒に社会問題の解決や新しい価値を創っていくということが大事ですので、そういった考えを持ってくださる方ですね、県は県で勝手にやるよということをおっしゃる方は、まずいと思いますけども、一緒にやりましょうと。そのときに、丁寧な意見交換ですね、もう県はこれで決めたからこれで、という話ではなくて、やはり市町の実情を理解して下さって、丁寧な意見交換を行って、一緒にやりましょうよと。そういう姿勢の方になっていただけたらいいかなと思います。

それから、これは静岡県の特徴ですけども、非常に大きな県ですから、どうしても東部・中部・西部のバランスの問題が出てきます。バランスを取っていくっていうのは極めて大事ですね、それを一方的にどこかという話になると分断のようなことになりますので、そうではなくて、バランスよく考慮、配慮していただいてですね、ただ、そうしていくと進まないということでは困りますので、バランスよく考慮して、そのバランスを取りながら、物事を前に進めていくと。そういう方になっていただけたらなと思っています。はい。

◆産経新聞

ありがとうございます。

◆司会

それでは、幹事社質問に関連したご質問を皆様からお受けしたいと思います。
はい、いかがでしょうか。よろしいですか。では、静岡新聞さんお願いいたします。

◆静岡新聞

静岡新聞です。よろしくお願いいたします。知事選に関して、今、正式に出るか出ないかはあれですけど、立候補者として2人名前が挙がっていることはご存知かと思いますが、難波さんとして特定の候補をどちらか支援するとかっていうお考えはありますでしょうか。

◆市長

まだ、それは決めてないですね。どなたが出られるかわかりませんので、決まってからということですね。決まってからといいますか、もっともっと確度が上がってから考えたいと思います。

◆静岡新聞

それぞれ政策なんかが出てきて、それによってはもしかしたらどちらかをいうことの可能性もある。

◆市長

それは十分ありえると思います。先ほど申しましたように、こういう方になっていただけた方が静岡市政としても、私個人の問題じゃなくて、静岡市政としてですね、こういう方になっていただいた方が物事がうまく進むなということですね。それが市民の幸せにも繋がるわけですから。そういったことがあれば、そういう方を自分自身も応援をしていくっていうのはあり得ると思っています。

◆司会

はい、先に静岡朝日テレビさんお願いいたします。

◆静岡朝日テレビ

静岡朝日テレビです。すいません、知事選に関連して伺います。まだ決まっていませんけれども、次の知事選に向けては、元副知事の大村さんと前浜松市長の鈴木康友さんが出馬する見通しとなっています。この2人に対する難波市長の期待と、あと評価を教えてください。

◆市長

はい。評価はまだ出ると決められたわけではないので、表明されている方はおられますけど、皆さん、それぞれいろいろな経験を持って、実績をお持ちの方々だと思いますから、どなたがなられても非常に良いとは思いますが、あまり個別の評価というのは避けたいと思います。

◆静岡朝日テレビ

すいません。追加で伺いたいのですけれども、浜松市の中野市長は、先日コメントを公表しまして、次の知事がその県の旗振り役が地域間対立の上で誕生するのは避けてほしいと話しました。難波市長もこれに関しては理解があるというお考えでしょうか。

◆市長

はい。私もその通りだと思います。先ほど申しましたように、静岡県の特徴ですので東部と中部と西部は横に大きく広がっていて、それぞれ特徴のある圏域です。その中でどこかに肩入れみたいな、肩入れというのは言い方が悪いので、どこかに重点を置きすぎるとやはり分断というようなことができきますから、そういうことがないように、静岡県全体として東中西バランスよくみんなが幸せになっていくような県政運営が大事だと思います。

◆静岡朝日テレビ

すみません。もう何点かありまして、難波さん、副知事の時代に、鈴木康友さんが浜松市長でいらっやって、一緒に仕事をする機会もあったと思うんですけれども、鈴木康友さんに対する評価は、たぶんどできないというコメントありましたけれども、人物像というか、こんな印象があるとか、仕事をした上でこんな印象を持ったというのがあったら教えてください。

◆市長

それは言うとも評価になりますので避けたいと思いますが、非常に立派な方だと思いますので、結果も出されていますから、立派な方だということだけ申し上げたいと思います。

◆静岡朝日テレビ

ちなみに大村さんは一緒にお仕事されたことはありますか。

◆市長

仕事はないのですが、いろんな要望活動をですね、コロナもやられていましたし、

いろんな面で総務省の中で重要な職責におられた方ですから、何かと相談に行って助言をいただいたことはあります。

◆静岡朝日テレビ

わかりました。ありがとうございました。

◆司会

はい、その他、中日新聞さんお願いいたします。

◆中日新聞

中日新聞です。先日、大村候補が市役所の難波市長を訪ねていらっしゃって、ただ会えなかったということですけど、大村候補から既に支援の要請などは難波市長に来ているのでしょうか。

◆市長

いえ、まだないですね。はい。先日お越しいただいたようですけど、たまたまその時来客中で、お会いできなかったという状況ですね。

◆中日新聞

今後、会う予定、アポイントなど入っていますか。

◆市長

入ってないですね。

◆中日新聞

ありがとうございます。あと、もう一点。先ほどの質問で政策など発表されてからの候補が出そろって支援する人を決めたいと言いましたけど、今後選挙戦に突入した後に、難波市長が街頭に立ってどなたかの応援演説をするという可能性もありますか。

◆市長

それはあんまり想定していないですね。そこまでやると、静岡市ですので、どうしても何か静岡市が表に出ていくと、地域間の何かが出るような感じが出るかも知れないので、あまり表だった活動はしないつもりです。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。はい、朝日テレビさんお願いいたします。

◆静岡朝日テレビ

しつこくてすみません。静岡朝日テレビです。表だって街頭演説、応援演説しないということですけども、それ以外に何か応援するとしたら、どんなことが考えられるのでしょうか。演説以外でもし特定の候補を応援するとしたら…

◆市長

先ほどお話ありましたように、こういう方がいいのではないですか、というのはありますし、この方はこういう方だったので私としては応援したいです、という気持ちは伝えるとか、そういうことはあると思います。

ただ、それとやっぱ街頭に立って、例えば、横に立って一緒に何かやるっていうのはもう全然次元の違う話ですから、そういうことはしないつもりです。

◆静岡朝日テレビ

ありがとうございます。

◆司会

はい。その他、幹事社質問関連でのご質問いかがでしょうか。よろしいでしょうか。では、その他のご質問をお受けしたいと思います。その他のご質問ある方、いかがでしょうか。はい、中日新聞さんお願いいたします。

◆中日新聞

明日で市長が就任1年ということで、その関連の質問をしたいと思います。2点伺いますが、まず一点目が、市長、この1年を振り返って、ご自身の成果と、あと反省点をそれぞれお願いします。

◆市長

はい。成果はですね、まず、この間の施政方針でも申し上げましたけども、やはり静岡市は政策の執行力、実行力ですね、政策を作ってもそれで結果を出すという力に課題があるというふうに思っていましたので、実際、市長になって、職員の皆さんと日々意見交換すると、やはり執行力に課題があるなど、一人ひとは優秀なのですけども、組織全体として執行力が高まっていないというところですね。それが課題でしたので、それに注力を置くということをしていきました。というのは、その部分がないと次に新しいことをやっても、要するにうまくいかないということですね。ですから、土台をしっかりと上げるというのが大事。例えば、植物が育つのであれば、土壌をしっかりと作っていくというのがまず大事で、それが土壌でもあるのですけど、その植物が育つ

土壌のところを一生懸命1年間やってきて、それは成果だというふうに思っています。その一方で、やはりそこに成果を中心に置くと、種も地中の中に入っていますから、それが芽が出て育っていくというところはなかなか見えてこないで、まだまだ社会の皆さん、市民の皆さんの目から見るとですね、何か大きく変わったなというところが見えないのではないかなと思いますが、そういう意味ではその点は反省点だと思います。それから、もう一つは、例えば危機管理であるとかですね、いろんな面で力を入れてきましたけど、手がまだ十分手がついてなくて、その取り組みを表に出していないもの、まだ地中の中でやっと小さな芽が出たくらいの状況ですね、そういうものがありますから、そういうものは、いくら私が成果が出たように言っても、実際には表には全く成果が出てないわけで、そういうところは非常に大きな反省点でもないんですけど、不十分な点ということだと思っています。

ですから、これから2年目になりますので、今度は地上に芽が出てきて、それが育っていくというところに力を入れていきたいと思っています。

◆中日新聞

ありがとうございます。2問目です。市長が昨年4月13日に初登庁されたときに、幹部職員の方を前に、「自分も実務をする。代打オレもある」と述べて、行政の現場に積極的に関与していく姿勢を示されていました。この1年間、市長はその職員の先頭に立って災害対応だったり、先ほど発表ありましたリニアの協議会、あとアリーナなど時にトップダウンで政策、事業の方針の決定を進めてきたようにも感じます。市長は現時点でもご自身を代打だと感じていらっしゃるのでしょうか。

◆市長

代打ですね。代打という言い方が良かったのかどうかというのはありますが、自分も代打というよりも、自分も一緒にプレーヤーですね。ですから、代打というのは表現がよくなって、フィールドプレーヤーの1人。野球で言うと監督で、方針出して、何かバントだとか何とかという、その指示を出すのではなくて、自分も一緒に守備をすとか、打席に立つですね、そういったのが大事ななと思ってやっています。

例えば、リニアの市の協議会なんかでは、自分自身が説明しているので、なんとなく代打ふうに見えるかもしれませんが、実際に日々仕事何やっているかという、例えば何か法令上の問題が何かあったときに、例えばそれは法律とか制度、法律そのものまで自分自身で読んで解釈をして、それでこういう方向がいいんじゃないかっていうところも、そこまでやりますので、それはもう代打じゃなくて、まさに市の職員と同じ位置でですね、内容の詰めを行うということをやっていますから、それは、でも、やっぱり大事なことはないかなと思っていますので、代打じゃなくてフィールドプレーヤーの1人もやると。もちろん監督業務もやらないといけないですけど、時には

フィールドに出てやるということ。ときにというか毎日フィールドに出ていますけど、そういうことも必要だなと思っています。

◆中日新聞

複数の職員の方から、むしろ主軸じゃないかと、リニアの姿勢を見ている、私もそういう印象を受けるのですが、主軸ではないですか。

◆市長

いや、市の仕事ってものすごく広範囲ですからね。たまたま目立つところで、ちょっと私が出て行くことがあると思いますけども、市の仕事って、もう主軸はないですよ。野球だったらフィールド9人で守っていますけど、何千人でやるような仕事ですからね。その中の1人が主軸っていうことはないと思います。私に限らず市の職員全体も、誰々が主軸でそうじゃないってことはなくて、みんな主軸でやっていくっていうのが大事だなと思っています。

◆司会

はい。その他、SBSさん、お願いいたします。

◆SBS

SBSテレビです。よろしくお願いします。今の質問に関連してなんですけれども、就任して1年経って、こんな1年だったなっていう率直な感想を、ちょっとだけいただいてもいいですか。

◆市長

想像していた通りの忙しさであるということは、想像以上に忙しいかもしれないですね。日々、本当にいろんな問題がある。就任したときからですね、ここは3,190mの間ノ岳から0mの駿河湾まであって、その中にいろんな生業があり、そして、いろんな暮らしがあり、そして、いろんな災害があるので、静岡市の課題は千も2千もあるんです。だから、何か一つやったら課題が解決っていうようなことはない、というふうにならずにずっと言ってきましたけども、まさに毎日、課題が五つも六つも出てくるような状況ですので、それを一つひとつ丁寧に解決に向かっていくっていうことをやってきたので、そういう面では充実はしていますけど、忙しいということは間違いないですね。

◆SBS

ありがとうございます。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。読売新聞さん、お願いいたします。

◆読売新聞

読売新聞と申します。今の関連した質問なのですけれども、先ほど人口減少についても言及がありましたが、課題が千も2千もあるという中で、2年目の静岡市政の主な課題みたいなところは、難波市長はどのようなところがあると考えられているか、改めて教えていただきたいのと、それに対してどういうふうに対応していきたいかというのをお願いします。

◆市長

はい。人口減少というのは市の中ですね、このまちに住み続けたいとは、なかなか思いにくいついていうところ。だから、もちろん子どもの生まれる数が少ないというのはありますけども、県外への流出、若い世代の県外流出というのは非常に多いですから、やはり、それはこのまちに魅力を感じない部分があるのだと思うんですね。とりわけ若い世代の方々が、やっぱりこのまちに住み続けて、幸せが実感できるようになるようなまちにしていけないといけないので、それは何か一つやったらもうこれで終わるということではなくて、本当にたくさんありますので、子育て教育環境もありますし、その前提として、やはり経済的なことですね、所得水準の向上であるとか、そういうこともあるし、これを言うと何か政策がないのではないかと、また言われる可能性があるんですけど、本当に課題山積ですよね。

ですから、2年目はこれをやるんだということで、何か解決をしていくというようなやり方ではなくて、地味ですけど、さっき言いましたように、全体をずっと底上げをしていくことが、人口減少対策だったり、市民の幸せの向上に繋がるのではないかなと思っています。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。静岡新聞さん、お願いいたします。

◆静岡新聞

静岡新聞と申します。すいません、ちょっと話そのリニアの話に戻って恐縮なんですけども、ちょっと確認させてもらいたくて、いただいた資料の4-2のところの図なんですけども…

◆市長

ちょっと、こちら出しますので。

◆静岡新聞

これで代償措置と環境回復のための協働の関係のあり方に関する図ですけども、こういう理解で正しいのかって確認なんですけども、想定される、リニアの工事に伴って想定される環境影響損失量っていうのが最大のものをまず想定しましょうよと。代償措置の考え方として、それを上回るようなＪＲ東海も加わった社会全体の大きな力によって、植生の回復措置を図れば、それを今回のリニア工事の環境影響に関する代償措置として認めますって、そういう考え方ってことでよろしいですか。

◆市長

はい。代償措置として認めますというよりも、これですから、代償措置はやっていただくんですけども、それはＪＲ東海だけでやってくださいと言っても、機能しないわけですね。植生の話で言うと、あるところで１万平方メートルの植生を回復しましょうと、 $100\text{m} \times 100\text{m}$ ですね。そのあたりの植生を回復するようにやりましょうと言って、ＪＲ東海の、これで想定される植生の減少量が、 $1,000$ だとして、その $1,000$ の分だけＪＲ東海やってくださいっていう話をして、結局はもっと広い範囲を回復していかないといけないわけですね、我々の責務としてやっていく、そういう覚悟でもあるわけですね。だったら一緒にやろうじゃないですか、ということです。ですからＪＲ東海にやれやれというだけじゃなくて、一緒にやりましょうよと。そうすると、もちろんＪＲ東海の部分もありますけど、全体としていいことになるので非常に相乗効果があるじゃないですかと。そういう考え方になります。

ただし、水生生物については、これは限られた場所で影響が出ますから、あまり社会の大きな力というよりも、やっぱり静岡市とＪＲ東海が一緒になって、じゃあ、ここを何とかしましょうと。例えば希少種の種の交雑が進んでいるので、DNAが混ざっているということがありますから、そういうことは、この社会の大きな力よりも、静岡市自身ももっと取り組んでいかないといけない話ですから、それをＪＲ東海と一緒にやりましょうということになります。

それによって、リニア事業の影響を上回る回復量をやります。これも一緒にやるからこそ相乗効果が上がるので、これはあなた、これ市と、そういうやり方をしないでやっていったらいいんじゃないかという考え方になります。

◆静岡新聞

わかりました。そのリニア事業の影響によるその損失に見合うというか、それよりも上回る回復になるんですよっていうことの確認っていうのは、これはその工事の実施前に確認して、それが確かにその代償措置として上回りますね、見合う、さらに上回りますねってことを確認する作業っていうのは、工事の実施前に確認するということ

ですか。

◆市長

ちょっと戻してもらえますか。このもう1個…。これが順応的管理ですので、今のことでですね、あらかじめやはり影響の予測をしっかりとるわけですね。ここがこのくらい影響出そうだと、典型的なのは沢ですけど、沢の流量が減少して、沢の最高点が下がっているわけですね。そうすると、生息域が間違いなく減っているわけです。ちょっとこの前のこれですね。例えば蛇抜沢にある種が住んでいるとして、この実施後はこの辺りが水がなくなる、渇水期になくなっちゃうわけですね。そうすると、ここに影響が出る、ここの影響量はある程度わかってきますから、ここにどんな生物が住んでいて、水生生物は移動できますので、それがこういうところに移動して住めるのか、それとも住めなくなってしまう、あるいは移動することによって、こちらにいる種との交雑が進むということもありますから、そのあたりの評価をしっかりとっていくということが大事だと思います。

次のページで。ただそうやっても、実際にやったらどうなるかっていう、あるいは、ごめんなさい。それで、そういうことだから、例えば生息場をもうちょっときっちり確保しましょうとやってやるんですけども、実際に工事をやったら影響が意外に違っていたと。ほとんど影響が出なかったらそれでいいですけど、より大きな影響が出たら元々考えていた代償措置は効かないので、もっと違う措置をしていかなければいけないですよって見直していくわけですね。保全措置自身を見直していくということですね。だから、事前に想定はするわけです。このぐらゐの影響が出たらこれで何とか代償措置ができるだろうとやるわけですけど、先に考えすぎても実際何が起きるかわかりませんので、こうやって観測をしながら、柔軟に対応していこうという考え方です。

◆静岡新聞

この回復量の、今、面積、植生に関しては、例えば、その群落の面積ですね、これで測る。これが一つのものさしになるということによろしいでしょうか。

◆市長

はい。植生については面積が非常に重要だと思います。

◆静岡新聞

あと、すいません。最後なんですけど、あとイメージとしては、シカの食害から保護するような柵とかをつけて、そこに、さっき市長がおっしゃったように種を撒くみたいなイメージなんですけど、それが、その移植・播種と違うんだよってことの違いがよくわからなくて、それは移植・播種を選択しないでそういうことをやるってということ

なんですけど、それが移植・播種とどう違うのかちょっとわからないんですけども。

◆市長

この次、この移植・播種というのはですね、ある場所がやられるので、元々やられるのは予想つくわけですよ。この蛇抜沢のところで影響が出そうだから、蛇抜沢に生えているものをそのまま抜いて、別のところに植え替えるっていうのはこの移植になります。あるいは蛇抜沢にあるところから種を取って、別の場所に植えますっていうのも、それも直接の播種になります。それは、そこにいるものをそのままここに持っていきましょうということですよ。

こちらはそうではなくて、別にここにいないものでなくてもいいんです。別のところから取った種でいいわけですね。結構、距離は離れている場所で、ちょうどいい、昔のお花畑があったところを回復しましょうとやって囲ってしまえば、そこで自然にまた生えてくる可能性もあるわけですよ。あるいは、ここで取った種をそこに播くのではなくて、元々他のところでやっていた、例えば、何々草というものが、例えばサクラソウというのがあったとして、そのサクラソウがここに生えてたんですけど、それをここから取った種じゃなくて、別のところに生えている種を取ってきて、それをここで撒くというのがありますので、これはもう直接の移植・播種だと考えていただければいいと思います。

そうではなくて、こちらはもっと大きな、ここ以外の場所からも含めた形での移植とか、播種があるということです。ただ、あまり移植・播種の問題よりも、やはりしっかりと囲って、その中で自然の回復を待つという方が自然かもしれないです。

◆静岡新聞

厳密に、そのの沢の上流域とかで消失してしまった植物そのものが、厳密に他の部分で回復しなくても、回復が難しいって先ほどありましたけども、そうすると元々そこに生えていた、シカに食害される前に生えていたものが生えてくるのが自然かと、一番定着しやすいかと思うんですけども、それを行うことによって、今の南アルプスの多様性の植生とか、政府の多様性の状態、南アルプスエコパークに認定されている生物多様性の状態というのは、維持されるというふうにお考えということですか。

◆市長

そうですね。植生というのは単独でそこで生きているわけではなくて、まずまさに生物多様性っていうのは、いろんな種がいろんな関係性を持ちながら、そこで生息しているわけで、その植物群とかですね、植生群みたいなことを言いますが、その群落として守っていくっていうのが一番いいと思います。例えば、風に強いものと風に弱いものとかいろいろありますよね。そういうのをいろいろ混ぜてやった方が植生は

豊かになりますので、そういう考えですね。

◆静岡新聞

ありがとうございます。

◆司会

はい。毎日新聞さん、お願いいたします。

◆毎日新聞

はい。毎日新聞です。今の質問に関連してですけど、絶滅危惧種であったり、リニアの工事によって失われる、ごく限られたところにしか生息できない植物は、それは諦めて別の種とかで、その多様な種を混ぜながら、一定の規模を、面積とかも含めて、また新たなところに作るっていうことで、絶滅危惧種とか、ある種については、もう絶滅しても仕方ないなっていう考え方なんでしょうか。

◆市長

この前の図ですかね。ちょっとここには書ききってないですけども、この資料には入ってますけど、特別な種については特別な対応が必要だと思っています。今、言ったのは、全体として植生については全体として守っていったらいいじゃないかと。特殊な種については、あらかじめ特定をしておいて、その種を何とかするというのを考えるということですね。だからこそ事前にどこに何が生えているのかということをしっかり調査をしてですね、それで掴んでおくと。そうすると、この部分がやられたときに、そこにいた特別な種があれば、その特別な種はどっか代替のところ、他のところにも住んでいますから、そこにしか住んでないということは滅多にありませんので植生についてはですね。だから、それについては他のところでもっと生息域を増やすようにするという形が大事かと思います。

ですから、ご指摘の通り全体をしっかり守るということと、特定の種については特定の種としての対策をとっていく、その両面が必要だと思っています。

◆毎日新聞

はい。ありがとうございます。

◆司会

はい、その他ご質問よろしいでしょうか。はい。それでは以上で本日の記者会見を終了させていただきます。ありがとうございました。

◆市長

ありがとうございました。

◆司会

次回は4月30日の火曜日の予定となります。よろしくお願いいたします。